



大明小学校

校長室から

令和元年9月18日

No. 28

文責 校長 飯久保一男

指導すべきことは…

その1 妻から聞いた話です。スーパーマーケットの入口で、その店で買ったお菓子を食べていた小学生たちが、その袋やごみを散らかしたまま帰ろうとしたところ、掃除担当のシルバー人材と思われる方が、その子たちを叱っていたという話を聞きました。いいオジサンじゃん、最近、人の子どもを叱れない大人が多いんだよな、と妻の話を聞いていましたが、話の続きがありました。子どもを叱った後、オジサンは「まったく、最近の学校は、ごみの捨て方も教えんだか！」と言っていたということでした。**む…**。ごみの捨て方を教えるのは学校？ どこへでも捨ててはいけないことを教えなければいけないじゃん…。

その2 私は、1・2年生を受けもったことはありませんが、3年生を受けもったことはあります。受けもった初日の帰りの時間、男の子が「先生、靴の紐を結んで。」と言ってきました。**むむ…**。驚きとともに「3年生なら、自分でやりなよ。」と言ってやってあげませんでした。その子は女の子に結んでもらっていましたが…。靴の紐を結んでやるのは、教員の仕事？ その前に、自分で結べないものを履かせてくるか？

その3 学級懇談会で、ある母親から「ウチの子は箸の持ち方がおかしいのですが、給食のときに先生から指導してもらえませんか。」という要望が出ました。**むむむ…**。「私がやることですか。」と聞き返したところ、他の母親から「それは家庭で教えることですよ。先生の仕事は勉強を教えることです。」という話が出て、この話は終わりになりました。後者のお母さん大好き！ 箸の持ち方は小笠原流礼法の授業でも取り扱うけど、本来教えるのは…。



教員の多忙化、働き方改革が注目され、学校はブラック企業だ、などといわれる現在です。教員が授業をすることだけ考えて仕事ができれば、私たちの仕事はだいぶ精選されるように思います。日本の教育が、本来、家庭で教えるべきしつけの部分を学校で指導するようにしてきてしまったともいえると思いますが…。

ドイツで子どもを育ててきた方が、日本の学校に来て感じたことをインターネットにあげていました。

小4の保護者会で、先生から学習内容や学校行事についての説明がありました。その中で気になったのは、“学校で学ぶこと”の中に教科学習だけでなく、生活指導の話があったことでした。例えば「自分からあいさつしよう」「時間を意識して行動しよう」などの態度が身に付くよう指導しているという話です。それは学校で学ぶことなののでしょうか。私はこの方針にとっても違和感を覚えました。日本の保護者は、学習面と「しつけ」の両方を学校で指導してもらうことに何の抵抗もないようでした。むしろそれを期待しているようにも見受けられました。ドイツでは子どもに生活上のルールを教えるのは親の仕事とされ、親が子どもに見本を示したり、他人への対応の仕方などを教えたりすることができなければ、親の役目はいったいどこにあるのか分からない、と考えられています。

コンビニで子どもが約3時間、4冊の雑誌を立ち読みして、何も買わずに帰ろうとしたとき店員に呼び止められ、その迷惑行為が学校に通報されました。先生はその子どもを指導し、家庭に連絡します。いかにも日本的です。もしドイツで同じように店員が学校に通報したら、学校は「うちの問題ではない」とあっさり電話を切るでしょう。子どもの生活態度の責任ははっきりと親に帰属するからです。

日本の学校は、集団生活のルールも指導します。ドイツでは、学校は学問の場としてのみ認識されているので、集団生活のルールを指導することには関心がありません。ドイツは多民族国家で、いろいろな価値観をもつ人が集まって社会を形成しているからです。こういう多民族の国では、「精神的に強くあれ」ということが指導されます。「精神的に強い」というのは相手よりも強くなれということではなく、「自分の意見をはっきりと表明すること。他人の意見も聞くこと。」「悪口を言いたいのなら、本人の前で言うこと。」というように、自分の意見を持ち、発言することが重要であると先生は子どもに口酸っぱく言うのです。そのため、ドイツの子どもたちは愚痴を言うことがあまりありません。愚痴を言うと「本人に直接言いなよ」と逆に諭されてしまいます。

また、ドイツの公立学校では「みんなでやろう」「みんなががんばろう」といったスローガンを掲げることがありません。日本では、運動会のような行事を通して全体で行動したり、グループをつくって仲間意識をもたせたりすることがよくあります。ドイツではそういった風潮がまったくといっていいほどありません。ドイツで子どもを育てていると、当時はあまり乗り気でもなかった日本の学校行事が、懐かしく、うらやましくなることがあるほどです。

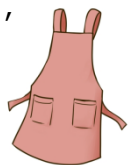
日本の教育がドイツの教育より劣っているとは思いません。教科指導だけでなく、社会のルールを学ぶ生徒指導・生活指導をすることは必要なことです。それを指導する日本の教育は優れていると思います。掃除の指導や給食の指導もそのためにもとても大切です。

世界的には子どもが学校を掃除しない国がほとんどです。自分たちの生活の場を自分たちで掃除することは絶対必要ですし、自分で心を磨くことにもなります。そのために教員の仕事は増えるのですが…。給食があることはお母さん方の大きな助けになっているようです。夏休み中は、子どもたちの昼食の心配をしなければならず大変だという話を聞きます。ところが、たまに給食ではなく、お弁当を持ってきて食べるという日があります。その日は昼の時間に余裕があり、教師にとってはホッとする日であることも確かです。

外国と比べて、日本の学校（教員）の役割は多岐にわたります。それがブラックといわれる所以ですが、大明小学校の教員が、子どもたちにとって有意義なことに時間をかけ、子どもたちのためにがんばれる学校にしたいと願っています。



社会人になって初めて迎えた母さんの誕生日。「いつもありがとう」ってプレゼントを渡したかった。でも照れくさいし、もし選んだプレゼントが気に入ってもらえないと怖かった。だから「選ぶのめんどいから」って嘘ついて、デパートに連れて行った。「何でもいいから適当に買えよ」とぶっきらぼうに言う。「高いエプロンだけどいい？」とおずおずと見せに来た。値札見たら、たった3000円。「こんな安物かよ」とひたたくって後ろ向いて、泣きそうな顔を見られないようにレジに走った。服でもバックでも、ほかに何でもあるだろ、もっと欲しいもの、高いものを買ってやりたくて、財布の中に給料全部入れてきたんだぞ！って涙が出たけど、トイレで急いで顔洗って、そ知らぬ顔で袋を渡した。そしたら、母さんがうれしそうにそれを抱きしめたのを見て、また泣きそうになった。今でも帰るたびにそのエプロンつけて飯作ってくれて、ありがとう。ほんと美味しいよ。世界一だ。いつも素直になれなくてごめん。マザコンでもいいよ、母さん大好きだ。



「いいはな新聞」より

以前に、この欄に、息子の初任給で買ってもらったポロシャツが着られなくて…と書いたところ、気にしてくれている職員がいます。夏の校長会の研修旅行のとき、着てやりました…。